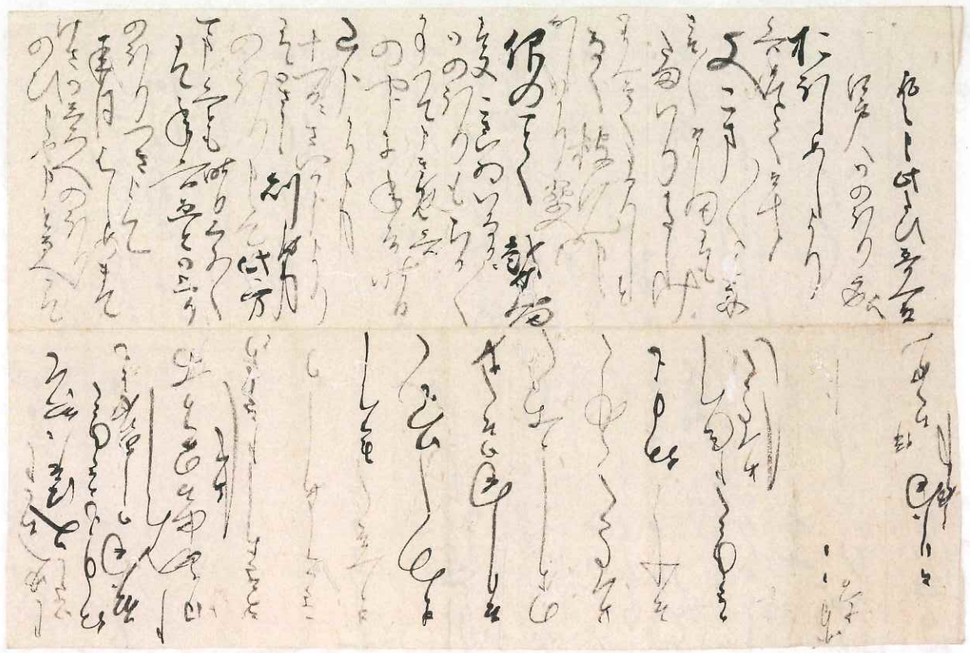
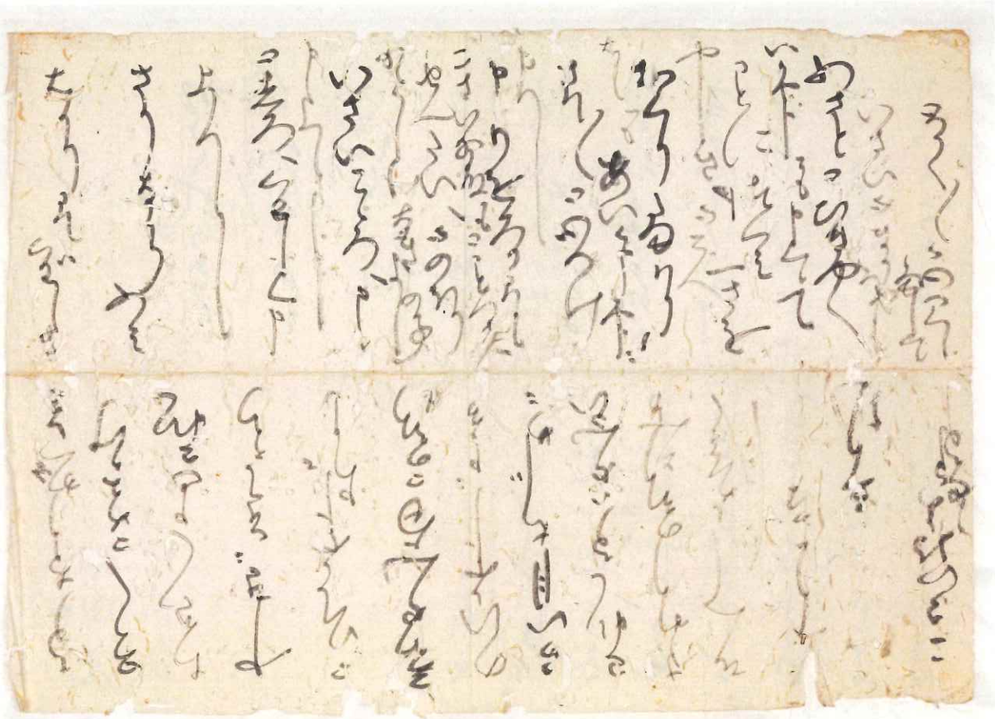
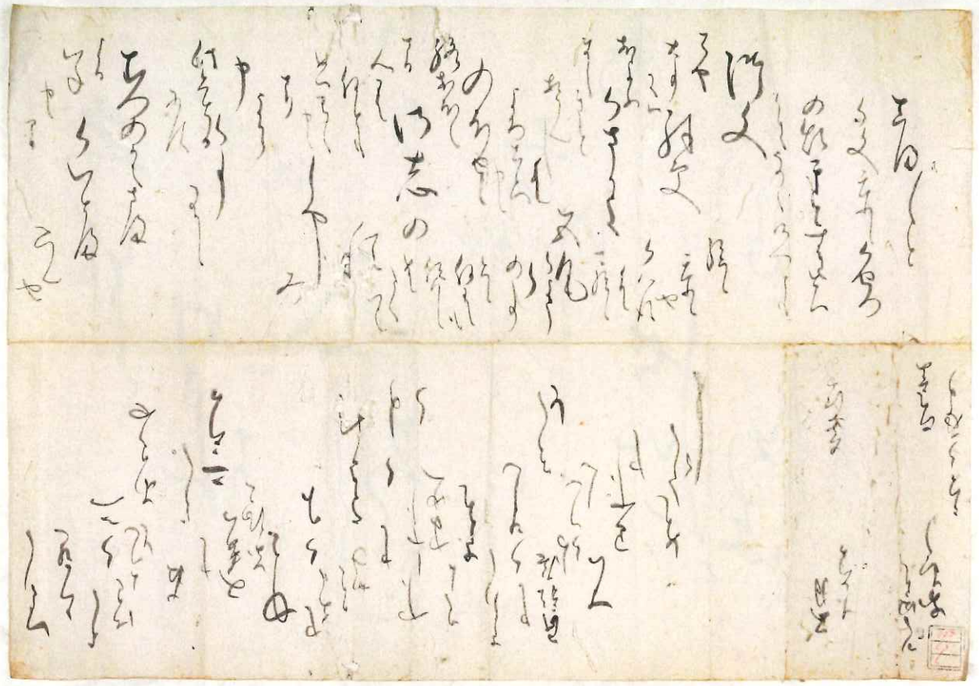


伊達宗信消息　牟宇姫宛（寛永3年）4月12日　〔7-57-49-28〕石川家資料　32.7cm×49.2cm（№39）



伊達宗高消息　牟宇姫宛（寛永3年）4月16日ヵ　〔7-57-48-2〕石川家資料　33.5cm×47.9cm（№47）

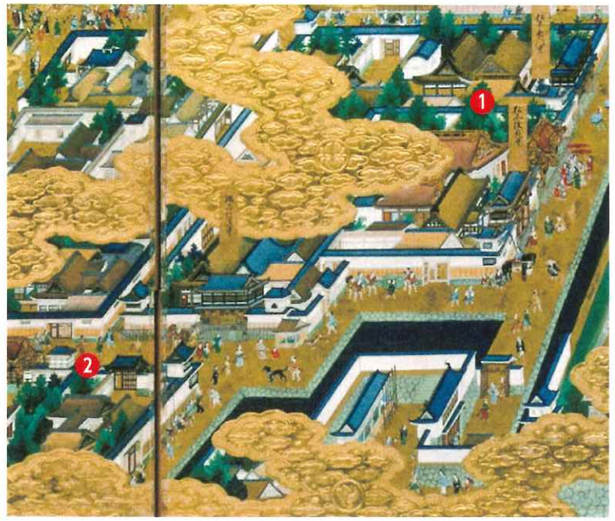


伊達秀宗消息　牟宇姫宛（正保2年）5月16日　〔7-57-400〕石川家資料　35.0cm×50.5cm（№17）

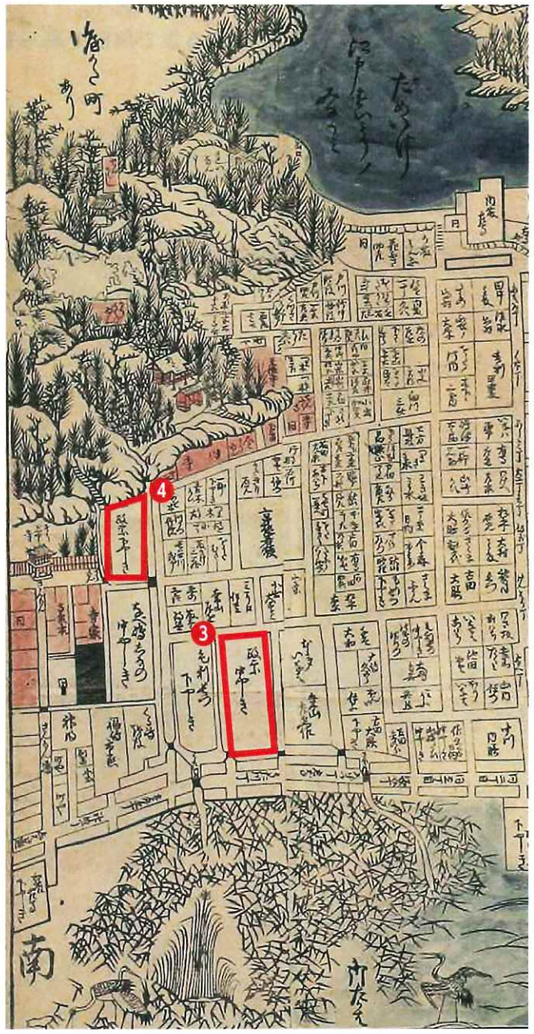
伊達忠宗消息　牟宇姫宛（正保2年）5月21日　〔7-57-49-19〕石川家資料　33.6cm×46.7cm（№23）

牟宇姫ゆかりの地　江戸

父政宗や兄たちが江戸に滞在中、または道中から牟宇姫に宛てた手紙が残されている。
その手紙からは、牟宇姫が離れた家族を気遣い、江戸の情報や文化にも触れていたことがうかがえる。

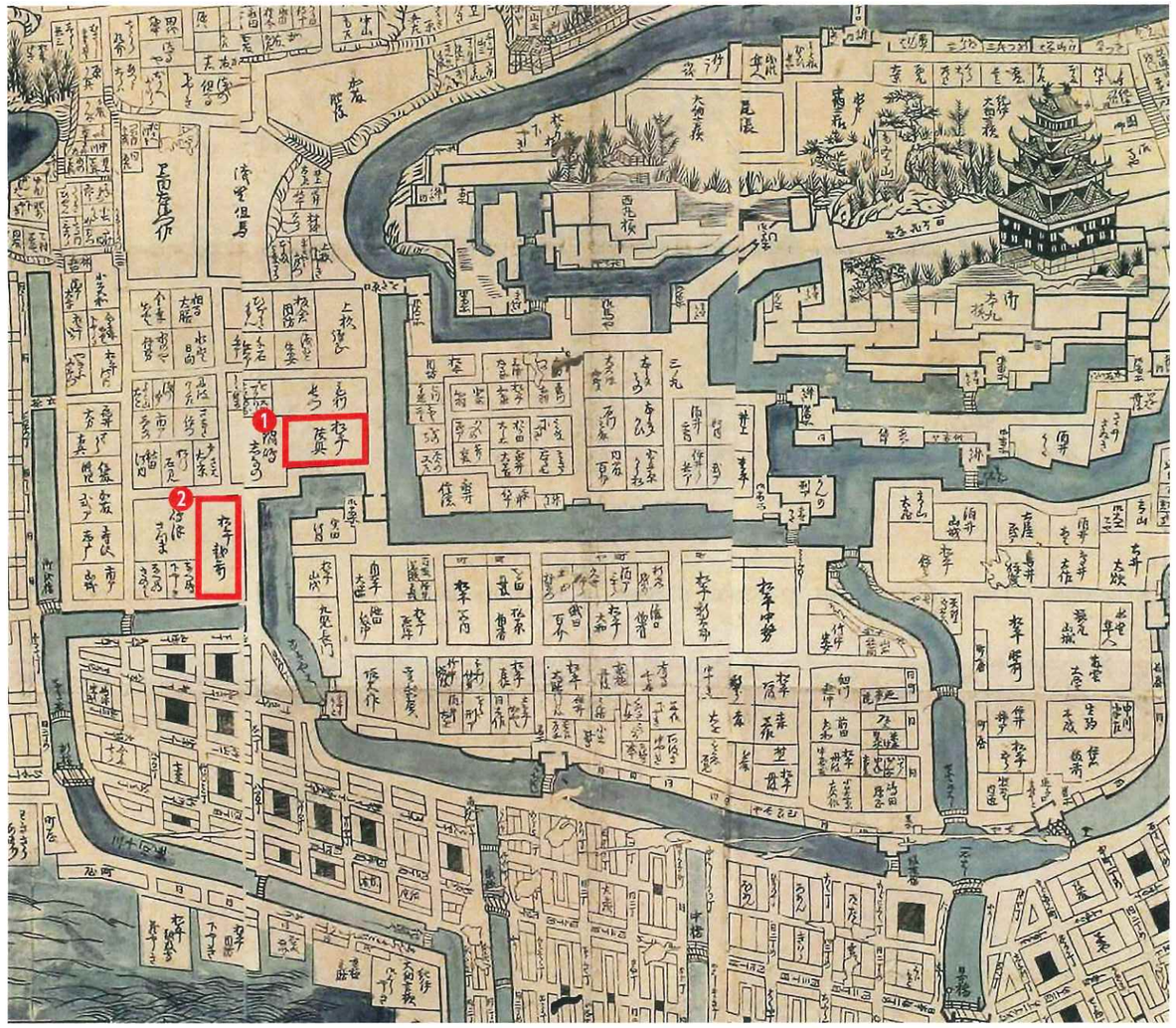


江戸図屏風（左隻部分）江戸時代前期　国立歴史民俗博物館所蔵
外桜田の仙台藩上屋敷①と本屋敷②。上屋敷には絢爛豪華な門が描かれている。（丸数字は右図に対応。）



武州豊嶋郡江戸庄図（部分）寛永9年（1632）　早稲田大学図書館所蔵
右上が江戸城、赤枠が仙台藩の江戸屋敷。①外桜田の上屋敷「松平陸奥（伊達政宗）」、②外桜田の本屋敷「松平越前（政宗嗣子忠宗）」、③愛宕下の中屋敷「政宗中やしき」、④芝の下屋敷「政宗下やしき」。

仙台藩上屋敷跡（東京都千代田区日比谷公園）



仙台藩上屋敷跡より本屋敷跡方面をのぞむ

寛永6年（1629）伊達政宗が桝形を構築した日比谷門の跡

江戸城日比谷堀　大手町方面をのぞむ

江戸城大手門

目次

口絵
発刊によせて
凡例
目次
牟宇姫関連略系図
牟宇姫への手紙二　伊達政宗ほか男性編について……1

伊達政宗（父・仙台藩主初代）……6
1　伊達政宗消息　牟宇姫宛　年月日未詳……14
　初の九献
2　伊達政宗消息　牟宇姫宛　（元和五年三月ヵ）日未詳……16
　作事により、お山を移す
3　伊達政宗消息　牟宇姫宛　（元和九年）五月十八日……18
　京に上る…道中、伊豆の三島より
4　伊達政宗消息　牟宇姫宛　（寛永六年）閏二月十四日……22
　鹿狩
5　伊達政宗消息　牟宇姫宛　（寛永八年）七月二十八日……24
　鮎鮨を贈る
6　伊達政宗消息　牟宇姫宛　（寛永九年）七月二十六日……26
　御鷹拝領
7　伊達政宗消息　牟宇姫宛　（寛永十年）三月十五日……28
　黒田騒動
8　伊達政宗消息　牟宇姫宛　（寛永十一年）三月一日……30
　梅花咲く
9　伊達政宗消息　牟宇姫宛　年月日未詳……32
　咳気
10　伊達政宗消息　牟宇姫宛　年月日未詳……34
　鷹野
11　伊達政宗消息　牟宇姫宛　年月日未詳……36
　手本を返す
12　伊達政宗消息　牟宇姫宛　（年月未詳）四日……38
　珍菓賞翫
13　伊達政宗和歌消息　お山宛　（年未詳）五月十六日……40
　五月雨に…
参考　伊達政宗消息　牟宇姫宛　（当館所蔵以外）……42

石川宗敬（夫・角田石川家三代）……64
14　石川宗敬消息　牟宇姫宛　（年未詳）九月十一日……68
　初舞の御誉

伊達秀宗（兄・宇和島藩主初代）……70
15　伊達秀宗消息　牟宇姫宛　（正保二年四月）十二日……74
　秀宗、大坂にて患う
16　伊達秀宗消息　牟宇姫宛　（正保二年）五月一日……76
　牟宇姫に香を贈る
17　伊達秀宗消息　牟宇姫宛　（正保二年）五月十六日……80
　牟宇姫より肴到来

伊達忠宗（兄・仙台藩主二代）……84
18　伊達忠宗消息　牟宇姫宛　（年未詳）三月十七日……90
　御鷹拝領
19　伊達忠宗消息　牟宇姫宛　（年未詳）二月晦日……92
　再々の手紙
20　伊達忠宗消息　牟宇姫宛　（年月未詳）九日……94
　節句の祝い
21　伊達忠宗消息　牟宇姫宛　（寛永二十年）五月十八日……96
　政宗ゆかりの御茶入拝領
22　伊達忠宗消息　牟宇姫宛　（正保元年三月）十八日……98
　おるりの縁談を祝う
23　伊達忠宗消息　牟宇姫宛　（正保二年）五月二十一日……100
　仙台下向…喜連川にて
24　伊達忠宗消息　牟宇姫宛　（正保二年ヵ）月日未詳……102
　鷹狩…高清水逗留
25　伊達忠宗消息　牟宇姫宛　（正保二年ヵ）七月十三日……104
　鷹狩の鶉（うずら）を贈る
26　伊達忠宗消息　牟宇姫宛　（正保二年）八月一日……106
　伊達光宗、患う
27　伊達忠宗消息　牟宇姫宛　（正保三年）一月十五日……108
　徳川綱吉誕生
28　伊達忠宗消息　牟宇姫宛　（正保三年）四月九日……110
　御目見え
29　伊達忠宗消息　牟宇姫宛　（正保四年）四月十九日……112
　仙台、不慮の火事
30　伊達忠宗消息　牟宇姫宛　（正保四年）五月八日……114
　仙台下向…白石にて
31　伊達忠宗消息　牟宇姫宛　（年未詳）一月五日……116
　新年の祝儀
32　伊達忠宗消息　牟宇姫宛　（年月未詳）七日ヵ……118
　登城をねぎらう
33　伊達忠宗消息　牟宇姫宛　（年月未詳）二十八日……120
　妙安・おるり御目通り（一）
34　伊達忠宗消息　牟宇姫宛　（年月未詳）三日……122
　妙安・おるり御目通り（二）
35　伊達忠宗消息　牟宇姫宛　（年月未詳）七日……124
　妙安・おるり御目通り（三）
36　伊達忠宗消息　牟宇姫宛　（年未詳）三月二日……126
　西館様の腫物
37　伊達忠宗消息　牟宇姫宛　（年未詳）六月二十八日……128
　暑中見舞い
38　伊達忠宗消息　牟宇姫宛　（年未詳）八月一日……130
　八朔の祝儀
参考　伊達忠宗消息　牟宇姫宛　（当館所蔵以外）……132

伊達宗信（兄・岩ヶ崎伊達家二代）……136
39　伊達宗信消息　牟宇姫宛　（寛永三年）四月十二日……138
　宗高の初参府を祝う
40　伊達宗信消息　牟宇姫宛　（年未詳）六月二十七日……140
　宗信の病

伊達宗高（兄・村田伊達家初代）……142
41 伊達宗高消息　牟宇姫宛　（年未詳）三月八日……148
病の快復を喜ぶ
42 伊達宗高消息　牟宇姫宛　（寛永二年）一月四日……150
年頭の祝儀
43 伊達宗高消息　牟宇姫宛　（寛永三年）二月九日……152
江戸からの知らせ
44 伊達宗高消息　牟宇姫宛　（寛永三年）二月十三日……156
仙台へ…雪降り
45 伊達宗高消息　牟宇姫宛　（寛永三年）二月二十七日……158
江戸へ…出立日決まる
46 伊達宗高消息　牟宇姫宛　（寛永三年）三月二十九日……160
江戸へ…出立日変更
47 伊達宗高消息　牟宇姫宛　（寛永三年）四月十六日ヵ……164
江戸へ…出立日変更、宗高・牟宇姫最後の願い
48 伊達宗高消息　牟宇姫宛　（寛永三年閏四月）三日……166
江戸へ…出立迫る
49 伊達宗高消息　牟宇姫宛　（寛永三年閏四月）九日……170
江戸へ…道中、瀬之上より
50 伊達宗高消息　牟宇姫宛　（寛永三年）閏四月二十二日……172
江戸にて…望み叶い申候
51 伊達宗高消息　牟宇姫宛　（寛永三年）五月四日……176
江戸にて…父政宗の威光
52 伊達宗高消息　牟宇姫宛　（寛永三年）五月七日……180
江戸にて…たばこ入れを贈る

伊達宗勝（弟・一関藩主）……184
53 伊達宗勝消息　牟宇姫宛　（正保二年）六月三日……186
江戸の近況

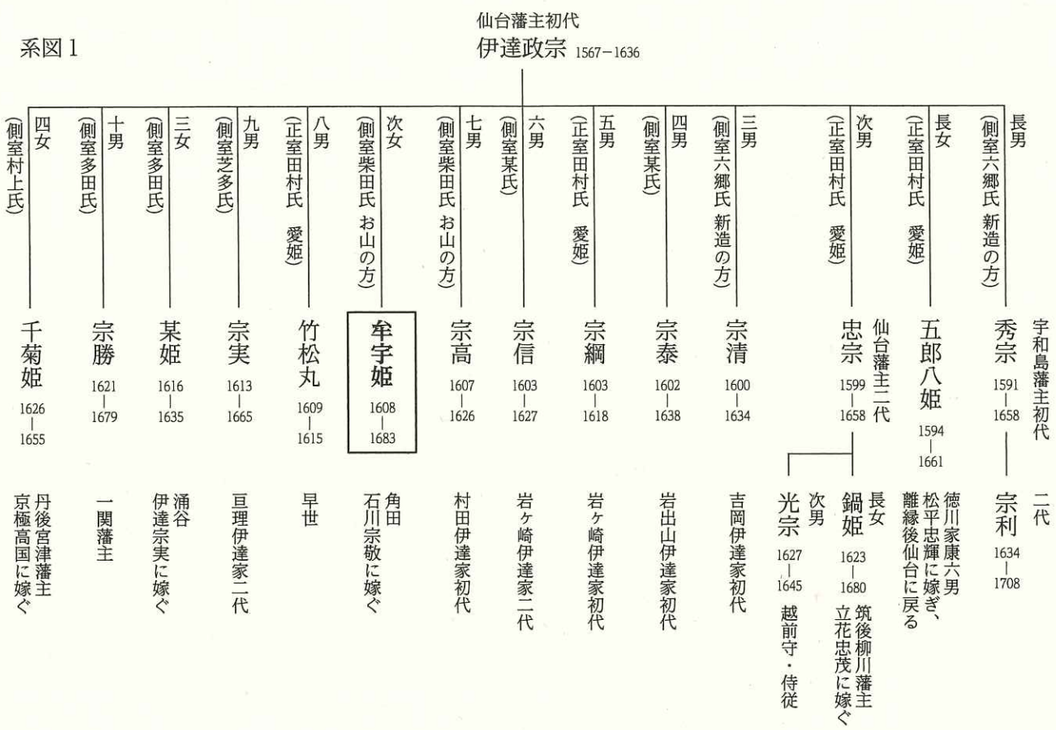
伊達宗利（甥・宇和島藩主二代）……190
54 伊達宗利消息　牟宇姫宛　（明暦三年）月日未詳……192
家督の御礼
55 伊達宗利消息　牟宇姫宛　（年未詳）五月二十一日……194
伊達宗利下向…宇和島到着

伊達光宗ヵ（甥・伊達忠宗次男）……196
56 伊達光宗ヵ消息　牟宇姫宛　年月日未詳……198
再々の文を喜ぶ
57 伊達光宗ヵ消息　牟宇姫宛　年月日未詳……200
見事の一筆

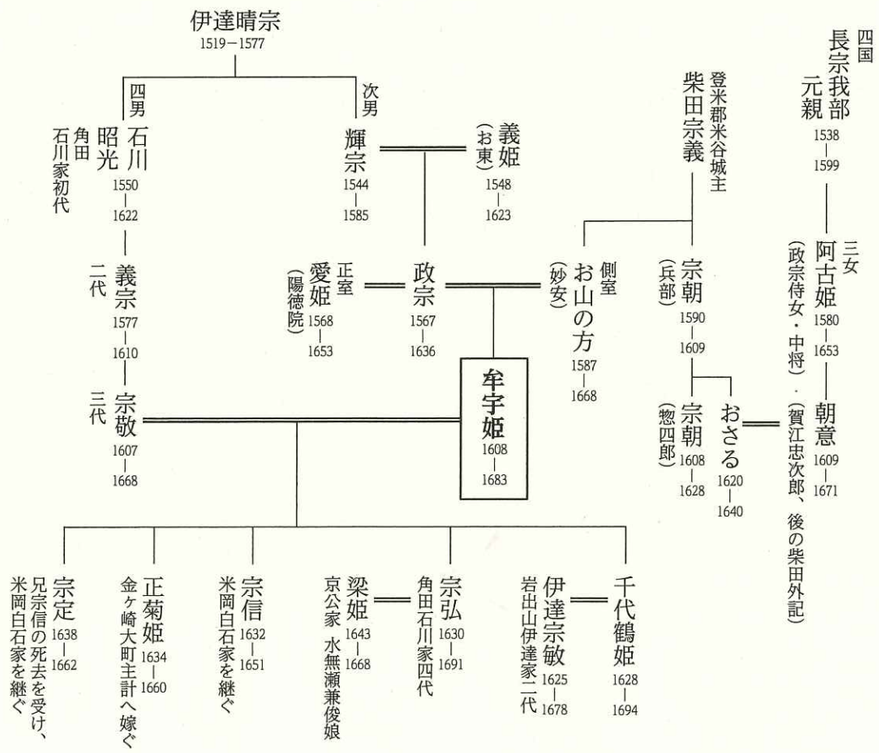
収録資料一覧……202
牟宇姫関連年表……206
主な参考文献・協力者……211

牟宇姫関連略系図

系図1



系図2



伊達政宗（父・仙台藩主初代）

一、伊達政宗

伊達政宗は、永禄10年（1567）8月3日、伊達輝宗の長男として米沢城（山形県米沢市）で誕生。母は山形城主最上義守の娘・義姫（後の保春院）である。幼名は梵天丸。天正5年（1577）11月15日に11歳で元服、「藤次郎政宗」と称した。13歳で三春城主田村清顕の娘・愛姫（後の陽徳院）と結婚。15歳で初陣を果し、18歳で家督を相続、米沢（山形県米沢市）を居城とした。慶長5年（1600）7月、家康の命で上杉景勝の支城白石城（宮城県白石市）を落とし、慶長6年（1601）仙台城築城開始。寛永3年（1626）徳川秀忠・家光に供奉して京都に上洛、従三位権中納言に昇進した。翌年、61歳で仙台若林城の築城を開始。以降、政宗の仙台下向中の活動拠点は、若林城が中心となった。寛永13年（1636）5月24日、江戸の仙台上屋敷で死去。70歳。法名は貞山禅利、瑞巌寺殿と号す。墓は仙台瑞鳳寺瑞鳳殿にある。

二、文化人としての伊達政宗

仙台藩初代藩主である伊達政宗は東北地方を代表する戦国武将である。戦国の乱世から豊臣の時代を経て、徳川家康・秀忠・家光の三人の将軍の下で徳川の世を生きた。

牟宇姫が見た武将としての政宗の姿はただ一度きり。慶長19年（1614）10月10日、仙台から大坂冬の陣に出陣した際の姿である。政宗48歳。牟宇姫は数え7歳のとき。翌年、大坂夏の陣で豊臣家は滅び、以後は戦のない時代となった。政宗は、若いころから政治・軍事・外交とともに文化面へも高い関心を払っていた。

現存する手紙や『治家記録』から見えてくる文化人としての政宗の姿は、漢詩や和歌、茶の湯、能、香といった文芸に心を傾け、武家に加え公家らとの交流にもひときわ熱心な姿である。人脈を駆使していち早く情報を入手し、世相を読んで素早く的確に動くことこそ藩の生き残りをかけた新たな時代の戦であると認識していたように思われる。

又、政宗は領内視察を兼ねた鷹狩や鉄砲狩（山追い）、川狩りを頻繁に行った。鷹狩は公家、武家の間で盛んに行われたが、仙台藩では良質な鷹の育成に励み、仙台藩の鷹は幕府への重要な献上品とされていた。狩りの獲物の多くは、幕府や他家の大名、家臣らと交流をはかるための贈答品として使われた。政宗が身に付けた、文化人としての類い稀なる教養もまた、人脈をつくるうえでの最強の武器であったと思えるのである。

三、伊達政宗の手紙

政宗の時代、武家の発給する文書は、専任の書き役「祐筆」に書かせるのが正規とされていたため、戦国武将は自筆の手紙が少ないと言われるなか、伊達政宗は実に多くの自筆の手紙を遺している。

平成19年3月に刊行を終えた『仙台市史　資料編10～13　伊達政宗文書1～4』（以下、『政宗文書』と略す。※1）には政宗自筆の手紙（書状・消息）が1500通近くも収録されている（※2）。

政宗は相手との信頼関係を築く上では「自筆の手紙こそが最高の手段」とのこだわりがあったと見え、代筆させた場合には文面で非礼を詫びたり、その理由を説明したりもしている。十男宗勝に宛てた「手紙は自分で書くように」との手紙も残る。宗勝に限らず、子どもたちには自筆で手紙を書くよう指導をしていたのだろう。

『牟宇姫への手紙一』に収録された政宗の長女・五郎八姫の手紙にも、自身で書く事へのこだわりが見て取れた。牟宇姫に宛てられた兄弟姉妹からの手紙の多くは自筆である。政宗の「手紙は自筆で書くべき」との考えは、政宗の子どもらにしっかりと根付いている。

政宗は、正室愛姫と7人の側室との間に十男四女、十四人の子をもうけているが、次女牟宇姫は側室お山との間に生まれた第九子、長女の五郎八姫以来、14年ぶりに誕生した女児である。

牟宇姫が嫁いだ石川家の「覚書」（2頁参照）によって、石川家にはかつて328通もの政宗自筆の手紙があったと分かっているが、『政宗文書』及び「伊達政宗文書・補遺」（『市史せんだい』17号～29号所収以下、「政宗文書・補遺」と略す。※3）には、牟宇姫以外の子に宛てた手紙も数多く収録されている。

下段の【表3】は『政宗文書』及び「政宗文書・補遺」に収録された政宗の手紙のうちから、子どもに宛てたものを書状と消息に分け、人物別に集計した一覧である。漢字が主体の書状は公的な文書の意味合いが強く、仮名文字が主体の消息はプライベートな内容を多く含んだ私信である。

※1　発行　仙台市　1994～2007年
※2　政宗自筆の手紙の数は、仙台市博物館『特別展図録　伊達政宗―生誕450年記念』平成29年10月7日「伊達政宗文書―花押・印章・署名・筆跡に見る概略―【自筆と祐筆書き】」を参考とした。
※3　編集発行　仙台市博物館　2007年9月～2019年9月。

【表3】　伊達政宗から子ども宛ての手紙数（令和3年3月現在）

『政宗文書』・「政宗文書・補遺」収録分　角田市郷土資料館調べ

氏名	誕生時政宗年齢（年令は数え年）	生年	没年	享年	政宗没年時（1636）年齢		手紙種類	内訳	合計
長男 伊達秀宗	25	1591	1658	68	46	宇和島藩主初代	書状	27	31通
							消息	4	
長女 五郎八姫	28	1594	1661	68	43	徳川家康六男・松平忠輝に嫁ぎ、離縁後仙台に戻る	書状	0	2通
							消息	2	
次男 伊達忠宗	33	1599	1658	60	38	仙台藩主二代	書状	75	83通
							消息	8	
三男 伊達宗清	34	1600	1634	35	—	吉岡伊達家初代	書状	25	28通
							消息	3	
四男 伊達宗泰	36	1602	1638	37	35	岩出山伊達家初代	書状	18	21通
							消息	3	
五男 伊達宗綱	37	1603	1618	16	—	岩ヶ崎伊達家初代	書状	1	1通
							消息	0	
六男 伊達宗信	37	1603	1627	25	—	岩ヶ崎伊達家二代	書状	4	4通
							消息	0	
七男 伊達宗高	41	1607	1626	20	—	村田伊達家初代	書状	1	1通
							消息	0	
次女 牟宇姫	42	1608	1683	76	29	角田石川宗敬に嫁ぐ	書状	0	46通
							消息	46	
八男 竹松丸	43	1609	1615	7	—	早世	書状	1	1通
							消息	0	
九男 伊達宗実	47	1613	1665	53	24	伊達安房成実の養子となる亘理伊達家二代	書状	20	41通
							消息	21	
三女 某姫	50	1616	1635	20	—	涌谷伊達宗実に嫁ぐ	書状	0	0通
							消息	0	
十男 伊達宗勝	55	1621	1679	59	16	一関藩主	書状	2	2通
							消息	0	
四女 千菊姫	60	1626	1655	30	11	丹後宮津藩主京極高国に嫁ぐ	書状	0	0通
							消息	0	

活の大半を若林の地で過ごすようになる。

若林城の敷地面積は東西約400m、南北約350mで、土塁は高さ二丈余（約6m）、堀の幅は30間（約54m）であったという。

政宗が若林城に移った五日後の11月21日、牟宇姫は第一子となる長女千代鶴（1628～94）を出産。千代鶴の食い初めの祝儀を受け取ったとの政宗の手紙（参考2―10）は若林城で書かれたものと思われる。

又、寛永11年（1634）2月18日、牟宇姫の5歳の長男国千代（石川宗弘1630～91）の「御袴御召初め（おんはかまおめしぞ）」は政宗が在仙中の若林城で行われた。牟宇姫は父政宗の存命中に四人の子を持つ母となる。政宗の娘は四人だが、政宗に孫の顔を見せられたのは牟宇姫ひとりだけであった。若林城で書かれた政宗の手紙（参考2―37）からは、父として祖父としての、政宗晩年の暮らしの一こまが見えてくる。

五、牟宇姫の母・政宗側室お山（妙安）

政宗七男・伊達宗高（1607～26）と次女・牟宇姫の母「お山（1587～68）」は伊達家家臣・柴田宗義の娘で、政宗より20歳年下である。息子の宗高（右衛門（えもん）・村田伊達家初代）は二十歳で亡くなり、政宗亡き後は妙安と称して牟宇姫のもとに身を寄せ暮らした。牟宇姫や孫たちと共に角田と仙台を行き来して、政宗の長女・五郎八（いろは）姫とも親しく交流したことが分かっている。

政宗の手紙には、お山の体調を心配したものが見受けられ、生涯健康ではなかったようだが、五郎八姫の手紙に登場する「お山（妙安）」は壮健で、娘や孫と共に幸せな晩年を過ごしている。

「お山」は政宗が亡くなってから32年後の寛文8年（1668）8月、82歳で亡くなった。法名は泰窓妙安、天渓院と号した。牟宇姫が嫁いだ石川家の菩提寺・長泉寺（宮城県角田市）に墓がある。

政宗の子をもうけた側室は七人いるが、「お山（妙安）」のように実名が分かることは珍しい。長泉寺には、お山の面影を伝える木像までもが残されている。

政宗が牟宇姫に宛てた手紙には「かもし（母文字）」（母）と呼ばれて登場する。牟宇姫の成人の祝いにと、親子三人で酒を飲んだ翌日のほほえましい手紙（No.1）も残されている。又、本書には関連史料として、政宗がお山に宛てた「伊達政宗和歌消息　お山宛（No.13）」も収録した。

さらに次頁以降、参勤交代や京への上洛など、『治家記録』による政宗の移動記録を記した「伊達政宗関連年表」を掲載したので参考にしていただきたい。

お山（天渓院）木像　長泉寺

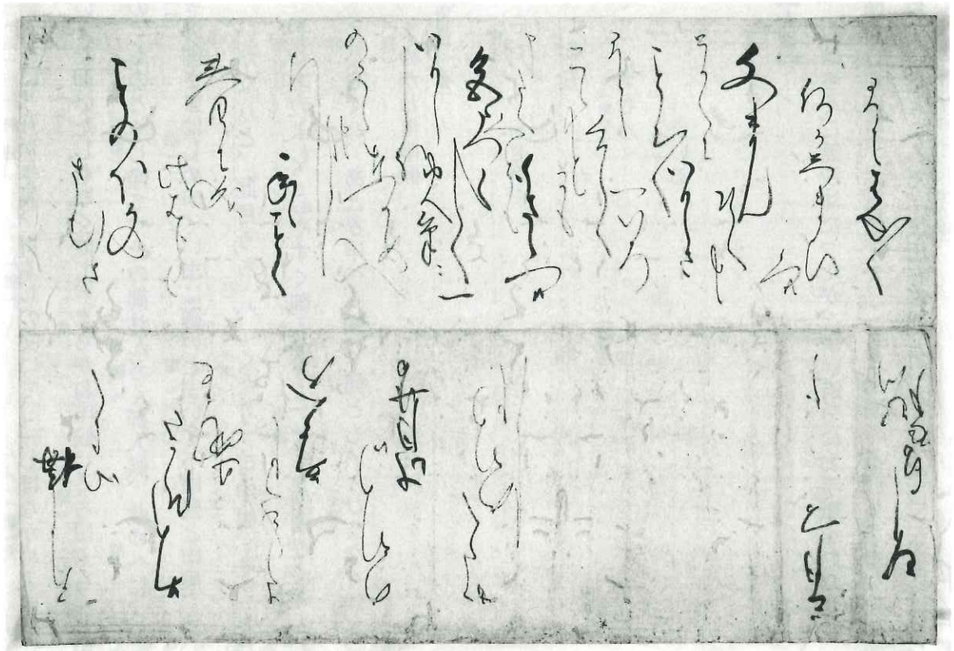
伊達政宗関連年表

※年齢は数え年。続柄は、牟宇姫からみたもの。政宗の移動記録は『伊達治家記録』をもとに作成。

年号	暦月（和は閏月、○は）	西暦	政宗年令	牟宇姫年令				
慶長	11	1606	40	—				
	12 ④	1607	41	—	5月3日　二代石川義宗嫡子熊増丸誕生。			
	13	1608	42	1				
	14	1609	43	2				
	15 ②	1610	44	3	11月晦日　二代義宗死去（34歳）。義宗長男熊増丸（4歳）、若年に付、隠居の初代石川昭光が家政に復帰。			
	16	1611	45	4				
	17 ⑩	1612	46	5				
	18	1613	47	6				
	19	1614	48	7	10月　大坂冬の陣、昭光（65歳）出陣。			

年号	角田石川家関係	伊達家・仙台藩関係	その他	仙台下向	江戸参府	京都上洛（大坂の陣）
慶長 11		6月　姉五郎八姫、初めて仙台城を訪れる。10月まで滞在。 12月24日　姉五郎八姫（13歳）、松平忠輝と結婚。				
12 ④		この年　兄長松丸（宗高・母はお山の方）誕生。				
13		政宗、松平姓を許され陸奥守に任じられる。 この年　牟宇姫誕生。母は、側室お山の方（22歳）。				
14		兄秀宗（19歳）、井伊直政の娘亀姫と結婚。 この年　弟竹松丸誕生。				
15 ②		この年、仙台城大広間造営成る。				
16		10月28日　慶長三陸地震・大津波発生。藩内の被害甚大。 12月13日　兄忠宗元服（13歳）、美作守に任ぜらる。	後水尾天皇即位。			
17 ⑩						
18		6月　姉五郎八姫、夫の松平忠輝転封により越後に移住。 9月15日　父政宗、慶長遣欧使節（支倉常長等）を派遣。 この年　弟喝食丸（宗実）誕生。	12月　幕府、キリスト教禁令発布。	7/17	7/10 4/21 4/5 12/21 4/19 4/9（駿府）	12/10
19	10月　大坂冬の陣、昭光（65歳）出陣。	4月8日から7月17日頃　父政宗、越後国付中で高田城（五郎八姫が嫁した松平忠輝の居城）普請。 10月1日　徳川家康、大坂征討を発令。（大坂冬の陣） 10月20日　父政宗、江戸を出馬。11月10日入京。 11月中旬　政宗隊、大坂城を包囲する徳川軍に合流。 12月20日　大坂冬の陣、和睦成る。 12月28日　兄秀宗、伊予宇和島十万石を与えられる。		10/10 7/28 3/16	10/20 10/16 4/1 3/21 7/17頃 4/8（越後府中） 11/中旬 11/10（徳川軍合流）	

8　伊達政宗消息　牟宇姫宛（寛永十一年）三月一日



〔7-48-49〕和田家資料　35・4×51・9㎝

尚々はや〳〵
何かしまひ　候へ共
文まん
そく申候
とかくに　いもしさ
ことに〳〵
にて候　一いろ
くハしく
こゝもと
にも
申たく　御さ候へ共
候へとも
色うつく　しく一
いもしゆへ筆ニ
しほ
のこし　なかめ
申候　入
かしく
まいらせ候
承候
春に成　ことく
此はうも
ことのほかの
さむさ

にて候梅
心よく
あり
つき
花も
さき申候
ゑとへの
のほりハ
此月廿日
かたく
のほり
申候
かしく

三月一日　ゟ
むもし　むつ
まいる返事

【原文】

文まんそく申候、ことに〳〵一いろ、こゝもとにも御さ候へ共、色うつくしく、一しほなかめ入まいらせ候、承候ことく、春に成、此はうもことのほかのさむさ』にて候、梅、心よくありつき、花もさき申候、ゑとへののほりハ、此月廿日かたくのほり申候、かしく、』

尚々、はや〳〵何かしまひ候へ共、』とかくにいもしさにて候、くハしく申たく候へとも、いもしゆへ、筆ニのこし申候、かしく

「（ウワ書）
三月一日　ゟ
（牟文字）むもし　（陸奥）むつ
（参）まいる返事　」

【大意】

手紙を受け取り満足している。ことに手紙に添えられ届いた一色、ここにも花は咲いているが、其方の花は色うつくしく、一入眺めて楽しんでいる。そなたの申すとおり、春になり、こちらも殊の外の寒さだ。梅のつぼみは快く枝につき、花も咲いている。江戸へは必ず今月二十日に上るだろう。

尚々、早々いろいろと片付けているが、あれやこれやで忙しい。詳しく説明したいが忙しさゆえ、思いを書き残した手紙となった。かしく。

【解説】梅花咲く

仙台藩初代藩主伊達政宗（1567～1636）から次女牟宇姫に宛てた自筆の手紙である。

必ず、三月二十日には江戸に上ると語っているが、『治家記録』には三月二十日出立の記録は残されていない。三月中の出立は二度。

元和5年（1619）3月18日、仙台城からの出立と、寛永11年（1634）3月19日の若林城からの出立である。

元和5年3月の参府時は、牟宇姫12歳。角田石川家に嫁いでまだひと月と立たない頃である。政宗は53歳。

もう一方の、寛永11年の参府時は、牟宇姫27歳。政宗68歳のとき。政宗が晩年を過ごした若林城からの出立である。手紙が書かれたのはこの時か。

「春になり、殊の外の寒さ」とあるが「春になり」とは立春を迎えたということ。立春は、二十四節気の一つで、現代であれば2月4日ごろ。まだまだ寒さ厳しいときである。

手紙の話題に梅花が登場するが、二人とも、ことのほか花を愛でたことが分かっている。

政宗が朝鮮出兵のおり、朝鮮から梅を持ち帰った話はよく知られているが、政宗が晩年を過ごした若林城跡（現在、宮城刑務所）には、今もなお「臥龍梅」の名を持つ老梅が香しい花を咲かせている。

伊達宗高（兄・村田伊達家初代）

一、伊達宗高

伊達宗高は、仙台藩初代藩主・伊達政宗の第八子、七男である。慶長12年（1607）仙台で生まれた。幼名は長松丸。母は側室・柴田氏お山。元和4年（1618）11月26日、仙台城において12歳で元服、右衛門宗高と称した。村田城を与えられ、柴田郡、刈田郡において三万石を領したとされる。

寛永元年（1624）10月、政宗が刈田峰（蔵王山）の噴火鎮静の祈祷を命じた王翼（明国から帰化）に同道、政宗の名代として刈田峰に登る。

寛永3年（1626）閏4月、兄伊達忠宗、宗泰とともに初めて江戸に参府。徳川秀忠・家光に拝謁。上洛の御供を許される。同年5月、父政宗、兄忠宗とともに徳川秀忠・家光に供奉して京へ上る。7月10日、従五位下右衛門大尉に叙任される。8月14日、疱瘡（天然痘）を発症。8月17日朝、寄宿所の京都二条要法寺において死去。二十歳。法名は涼山英清、龍島院と号した。墓所は宮城県村田町の龍島院である。

二、伊達宗高から妹牟宇姫への手紙

伊達宗高は牟宇姫の一つ年上の兄で、牟宇姫とは母が同じ兄妹である。二人とも仙台城で生まれており、元服前の幼いころを共に過ごした仲であろう。かつて牟宇姫宛ての手紙を整理した時の記録と思われる「覚書」（2頁参照）に記された宗高の手紙は21通。現存を確認できた手紙は12通。残る9通の行方は不明である。

本書に収録されたうちの10通（No.43～No.52）は、寛永3年（1626）2月9日から5月7日までの四ヶ月にわたる手紙であり、宗高の初の江戸参府と京への上洛を話題とした一連の内容である。

初めて目にする江戸、大御所徳川秀忠・将軍家光へのお目見え、さらには京都への上洛と、政宗の息子として華々しい飛躍の年となるはずであった。

仙台を立つまでの手紙には、牟宇姫との別れを惜しみつつ、これから待ち受ける出来事の一つ一つに胸躍らせる二十歳の若者の思いが溢れている。江戸に向かう途中で書かれた手紙には、宗高を送り出した者たちへの感謝の気持ちがつづられ、江戸で書かれた手紙からは、江戸の賑わい、父政宗の威光を目の当たりにした宗高の興奮が伝わってくる。

牟宇姫も又、宗高の体験を我がことのように感じ、一緒に喜んでいたのに違いない。宗高のもとには、矢継ぎ早に牟宇姫の手紙が届いている。

宗高はいくつかの願いを胸に、江戸に上ったようである。父政宗と共に徳川秀忠・家光親子に供奉して、京都に上洛することもその一つであった。京へのお供が許され、「また、願いが一つ叶ったぞ」と誇らしげに手紙に書いている。

最後の手紙は寛永3年5月7日に書かれたもの。京に向かう日が決まったと告げ、追伸には江戸で流行りのたばこ入れを贈ると書いている。

この後、宗高は父政宗、兄忠宗と共に京に上り、7月、大名格の従五位下右衛門大尉に叙任されるも、そのひと月後、流行り病の疱瘡に罹り京都で没した。病の発症から亡くなるまでは僅か数日。あっという間の出来事であった。牟宇姫の元に残された手紙は文字通り宗高の形見である。

手紙が書かれた場所

宗高の手紙が書かれた場所はおおよそ五ヶ所。宗高が江戸に立つまでの数ヶ月は、仙台城、仙台屋敷、村田城などで書かれたものと思われる。江戸に参着した後は、四ヶ所あった仙台藩江戸屋敷のどこかで書いたのだろう。又、1通は江戸に向かう道中の瀬之上（福島県福島市）で書かれたものである。

（一）仙台城

仙台城の完成は慶長15年（1610）頃である。本丸の中心である大広間は畳敷き260畳の広大な床面積を持ち、縁側を含めれば430畳もの広さがあった。仙台城が建つ青葉山は、南は渓谷、北は沢、西は奥行き深い山林で、さらに東の前面には高さ64mの断崖があり、その下を広瀬川が流れている。

本丸の南半分は、いわゆる「奥」の部分にあたり、藩主に仕える女性が暮らす建物などが設けられた。

江戸に向かう途中から牟宇姫に宛てた手紙には「この手紙を仙台の御城へ届けてほしい」と書いてあり、仙台城の奥向きには、母「お山」や、乳母「おあちゃ（御阿知也）」が居たのではなかったか。

（二）宗高の仙台屋敷

手紙に幾度となく登場する宗高の仙台屋敷については未詳である。

政宗の息子や重臣たちは仙台城近くに各々仙台屋敷を拝領していた。『治家記録』には、元和4年（1618）11月5日辰下刻（午前9時）、政宗が元服を控えた長松丸（宗高）の私邸に出かけたとの記録が残る。

政宗四男・宗泰の屋敷は、後に二の丸が建てられた場所にあったことが分かっており、宗高の屋敷も仙台城のすぐ近くにあったと思われる。

（三）村田城

宗高は村田城（宮城県村田町）を与えられ、柴田郡と刈田郡に三万石を領したといわれる。

村田城は、丘陵上に築造された平山城で、大きさは東西約500m、南北約400m。現在、城山公園として整備された丘陵頂部が本丸の跡である。標高は57m。西を望めば蔵王連峰が美しく見える。かつての二の丸には、現在、村田町役場と村田小学校が建っている。

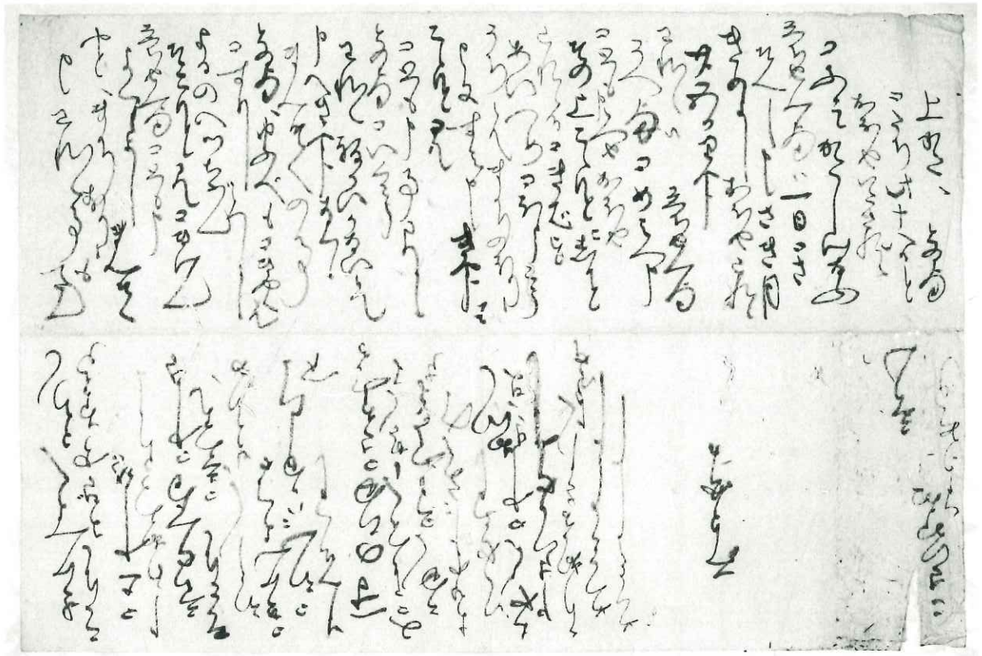
村田城は天正19年（1591）、政宗長男・秀宗（宇和島藩祖）が生まれた場所であり、宗高が館主となる前は、政宗の叔父・石川昭光（1550～1622）の隠居所であった。昭光は、牟宇姫が嫁いだ角田石川家の初代であり、牟宇姫の夫・石川宗敬の祖父である。

（四）江戸屋敷

徳川幕府開設直前の慶長7年（1602）10月、父政宗は伏見から江戸に移った。家康からは、四つの江戸屋敷を拝領。江戸城に近い外桜田の上屋敷、上屋敷に隣接した山下門内の本屋敷、愛宕下の中屋敷、芝の増上寺脇にある下屋敷である。政宗の居住地は外桜田の上屋敷、世嗣となる兄忠宗の住まいは本屋敷であった。中屋敷、下屋敷は藩主の家族などが住む屋敷である。

宗高が江戸で書いた手紙は3通だが、宗高の江戸での宿所は未詳である。

51　伊達宗高消息　牟宇姫宛（寛永三年）五月四日



〔7-57-49-12〕石川家資料　32・6×48・2㎝

上かた、　とのさま
御たち此十八日と
おほせいたされ候
御ふミかたしけなふ
ゑちせんさまハ一日御さ
そんし申候さき月
きのよしおほせられ候
廿五日りやう
われ〳〵ハ　ゑちせんさま
うへさま御めミへ申
御とも申候へ由おほせ
その上こゝもと二しかと
られ候間御きばを
あいつめ御ほうこう
うち候てまかりのほり候
申候　又すミ申候きやう へも
こゝもとにて
御とも申事にて候
とのさま御いくわう
われ〳〵ねかひかなひ候て
申へきやうなく候
まんそくの事
とのさま へゆふべも御きやくにて
御すもし候へく候
よるの八つちぶん
そこもとにて御きけん
ゑちせんさま御とも申
よく候よしまんそく
やと へまかりおり候
申候　われ〳〵事も一たん
きけんよくにち〳〵
こゝもとにぎやかなる事
御上やしき
申もおろかにて候
ゑちせんさま御やしき
そこもと　御しろにて
ほう〳〵へまかり出
御きけんよく候由
御ほん二ハ候ましく候　へ共
まんそく申候
一寸のひま御さなふ候間
又御ことつて候かた〳〵へも
こま〳〵ともふミをもま
よきやう二たのミ入候
いらせ不申候　おひ〳〵
はや〳〵御やしき へま
申まいらせ候へく候
かり出候間さう〳〵申まいらせ候
めてたくかしく
めてたくかしく

五月四日

ゑもん

こさい将殿
御申御返事

【原文】

御ふミかたしけなふそんし申候、さき月廿五日、りやううへさま、御
めミへ申、その上こゝもと二しかとあいつめ、御ほうこう申候、又すミ
申候、きやう へも御とも申事にて候、われ〳〵ねかひかなひ候て、
まんそくの事、御すもし候へく候、そこもとにて、御きけんよく候よし、
まんそく申候、われ〳〵事も、一たん』きけんよく、にち〳〵御上
やしき、ゑちせんさま御やしき、ほう〳〵へまかり出、御ほん二ハ、候
ましく候へ共、一寸のひま御さなふ候間、こま〳〵とも、ふミをもまい
らせ不申候、おひ〳〵申まいらせ候へく候、めてたく、かしく、』
上かた へ　とのさま御たち、此十八日とおほせいたされ候、』
ゑちせんさまハ、一日御さきのよし、おほせられ候、われ〳〵ハ、
ゑちせんさま御とも申候へ由、おほせられ候間、御きばをうち候て、
まかりのほり候、こゝもとにて、とのさま御いくわう申へきやうなく
候、とのさま へゆふべも御きやくにて、よるの八つちぶん　ゑちせん
さま御とも申、やと へまかりおり候、』こゝもとにぎやかなる事、申
もおろかにて候、そこもと、　御しろにて御きけんよく候由、
まんそく申候、又、御ことつて候かた〳〵へも、よきやう二たのミ入候、
はや〳〵御やしき へまかり出候間、さう〳〵申まいらせ候、めてたく、
かしく

（寛永三年）
五月四日

「（ウワ書）
ゑもん（右衛門）
こさい将殿（小宰相）
御申御返事　」

【大意】

お手紙、かたじけない。先月二十五日に両上様（徳川秀忠・家光）にお目見えし、しっかりと勤番している。又、願いが一つ叶ったぞ。京へも御供することになった。願いが叶い、我々がどれ程喜んでいるかを想像してほしい。そなたも元気にしているとのこと、うれしく思う。我々もひときわ順調に、毎日御上屋敷や越前様（忠宗）のお屋敷など、あちらこちらに出かけている。そなたは信じないかもしれないが、ほんの少しの暇もなく、こまごまとした手紙も書けないでいる。追々、きちんと手紙を書こう。

追伸、上方への殿様（政宗）の御立は五月十八日、越前様（忠宗）は一日先の御立となった。我々は越前様に御供せよとの仰せなので騎馬で上る。ここ江戸での殿様（父・伊達政宗）の御威光は申すべき様もないほどだ。

殿様へ夕べも御客があったので、夜の八つ時分（午前2時頃）、越前様に御供をして宿に帰った。ここでの賑やかさといったらないぞ。言葉にさえ出来ない。

そちら（仙台）の御城でも御機嫌よくされているとのこと、嬉しく思う。また、伝言を寄越してくれた方々へもよろしく伝えてほしい。早速お屋敷に出かけるので、慌ただしい手紙となった。すまない。

【解説】 江戸にて…父政宗の威光

伊達政宗七男・伊達宗高（1607～26）が妹牟宇姫に宛てた自筆の手紙である。

前出の閏4月22日の手紙（№50）と一連の内容。寛永3年（1626）5月4日に江戸で書かれた返事である。日付から察するに牟宇姫は閏4月22日付の宗高の手紙を受けとるや、すぐ又江戸へ手紙を出したのだろう。

宛名の「小宰相」は牟宇姫の侍女、「御申」とは牟宇姫への手紙披露を依頼するもの。

『治家記録』によるとこの年閏4月6日、伊達忠宗（越前・政宗次男）は弟の宗泰（三河・政宗四男）、宗高（右衛門・政宗七男）と共に仙台から江戸に向かう。忠宗が江戸に着いたのは閏4月13日。宗高と宗泰の到着日は『治家記録』には書かれていない。宗高が書いた牟宇姫あての手紙から、宗高は翌日14日、宗泰は三日後の16日に江戸に着いたと思われる。宗高にとっては初めての参府であった。

手紙には閏4月25日に徳川秀忠と将軍家光へ御目見えしたこと、京への御供を許されたことを知らせており「又、願いが一つ叶った」と喜びを語っている。

「京への御供」とは、父政宗、兄忠宗と共に徳川秀忠・家光親子の上洛に供奉すること。政宗は、両御所上洛の先駆を仰せつかり、供奉する大名達の先頭を切って京都に上ることになっていた。

この年の徳川秀忠・家光の上洛は後水尾天皇を京都二条城に迎え、徳川幕府の権威を天下に知らしめるためのもの。追伸には、政宗の京への出立が5月18日であること、宗高自身は忠宗（越前）の御供として一日先の17日に京に向かうと書いている。

さらに宗高は「江戸での殿様（伊達政宗）の御威光は申すべき様もない」と感激し、毎日政宗のいる仙台藩の上屋敷（外桜田）や忠宗の屋敷に出向いているとも語っている。

忠宗の屋敷とは外桜田にあった本屋敷のことと思われる。仙台藩では世嗣となる嫡子の屋敷である。宗高の宿は藩主家族の住む愛宕下にあった中屋敷か。あるいは芝にあった下屋敷ではなかったか。

このころの江戸の様子を描いた「江戸図屏風」には、宗高が語る賑わいそのままの仙台藩江戸屋敷の様子が描かれている（口絵参照）。

この手紙が書かれた前日、政宗は宗高に一通の書状（※1）を送っている。手紙の内容は次のとおり。

「この度、京都への上洛にあたり、お前（宗高）に一廉の馬どもを牽かせるのは、年来努力してきた心がけのあかしと感心している。粕毛の馬（灰色に白いさし毛の混じった馬）も、先ず、軽々しくよそへ遣わすことを遠慮するのはもっともの事と思う。追伸、各々へ差し上げる馬どものことは、明日、中島監物（政宗側近）に相談するとよい。」

宗高は、日頃の努力が認められ、馬に関わる何らかのお役目が与えられていたのだろう。文末に「早速お屋敷に行かねばならないので、慌ただしい手紙となってすまない」と書いたのは、政宗の指示通り、馬の件を中島監物へ相談するためであったのかもしれない。

※1 『市史せんだいvol・21』「伊達政宗文書・補遺（五）」補60番。

伊達政宗書状　伊達右衛門太輔宗高宛　（寛永三年）閏四月廿一日

今度、一廉之馬共為牽、年来心懸之験与奇特候、糟毛之馬も、先々聊爾ニ与所へ遣候事、遠慮尤候、恐々謹言、
（袖追書）尚々、各へ進候馬共之義、明日、中島監物（貞成）ニ相談可然候、以上、（行間書）
後（寛永三年）四月廿一日　政宗（花押）
（伊達宗高）伊右衛門太輔殿　政宗

仙台藩上屋敷の門があった辺りから江戸城をのぞむ　（東京都千代田区）